日刊工業新聞　2011年6月27日

（第3種郵便物認可）

中国拠点　あす本格稼働

南武社長　野村　和史氏に聞く

現地に権限委譲、士気向上

油圧シリンダーの専業メーカー、南武（東京都大田区、野村和史社長、03・3742・7377）は28日、中国生産拠点「南武油缸（常州）」を本格稼働させる。海外現地法人はタイに次いで2カ所目。アジアの旺盛な需要を背景に、主力の自動車エンジン金型の中子抜きに用いられる油圧シリンダー事業が堅調。タイ現法は2012年6月をめどに拡張計画を進めている。中小企業のグローバル戦略を野村和史社長に聞いた。

（南東京・谷森太輔）

◆◇◆

―江蘇省常州市を中国での進出先に選んだのはなぜですか。

「8万人規模の職業訓練校が整備されているなど産業支援が充実している。南武油缸（常州）の総投資額は約3億円。当初は25人でスタートし、1年後には50人規模にしたい」

―海外進出に積極的です。

「中子抜き油圧シリンダーの売れ行きは自動車市場の動向に直接左右される。国内の売上高はリーマン・ショック前の8割の水準のまま。外需を取り込まない限り、大田区の中小企業といえども生きていけない時代になった」

―02年に初の海外法人をタイに設立しました。

「当初はコスト削減のために部品を作るだけだった。アジアの自動車産業の成長はすさまじく、徐々に製品の組み立てまで行うようになった。現在タイ現法では2交代の24時間生産を続けているが間に合わない。来年6月をめどに工場を拡張する。人員は2倍の100人規模になる見通しだ」

―海外進出を成功させるキーポイントは。

「現地に権限を全面的に委譲することだ。例えば、タイ現法の拡張計画は、本社から派遣した30代の日本人社長に一任している。若いうちから海外で活躍できるとあって、社員が海外赴任に積極的になってきた」

―今後、日本の拠点はどう変わりますか。

「基幹部品の製造については、国内で続けていく。ロータリージョイント（回転継ぎ手）や回転軸は日本でしか作れないためだ。一方、タイ現地法人に設計者2人を派遣している。現地での設計は順次拡大していく」

―タイ、中国の次はインド市場が控えています。

「現在、インドは輸出で対応しているが、ドイツメーカーとの競争になっている。円高ユーロ安を背景に戦いは厳しい。3年以内に商社と合弁で現地に販売拠点を作りたい」

のむら・かずし　61年（昭36）青山学院大経卒、同年南武鉄工（現南武）入社。63年ドッドウェル入社。84年南武生産管理部長、95年社長。神奈川県出身、73歳。